

多摩川河口にコアマモの天然群落 は形成されるのか

はじめに

2000年頃の東京湾におけるコアマモの分布は、千葉県側では盤洲干潟や富津干潟に、神奈川県側では金沢八景(野島公園)以南の内湾域に認められたが(輪島ほか, 2004)、多摩川河口干潟を含む東京湾奥での自然分布は確認されなかった。

私たちは、2015年8月に大田漁業協同組合の組合員から寄せられた情報に基づき、多摩川河口において、東京湾では希少であるコアマモが局地的に生育していること確認した。2016年以降は、東京湾一斉調査の一環として、その生育状況を継続的に調査している。



写真1 調査エリア

多摩川河口群落①

2015年に生育を確認したコアマモ小群落は、小規模ながら定着して地下茎が維持され、地上部の現存量が季節的・経年的に変化している多年生群落であることを確認した。



写真2 調査の様子(2019年8月)



写真3 生育状況(2017年8月)



写真4 株密度計測(2016年8月)

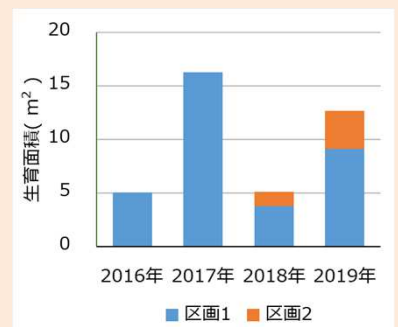


図1 生育面積(8月調査時)の推移

その後、2020年2月までは小群落が確認されたが、2020年6月以降、現在までコアマモの生育は確認できておらず、消失したと考えられる。

多摩川河口群落②

2022年8月上旬、群落①が生育していた場所より上流の大田漁業協同組合地先において、0.1m²未満の範囲にコアマモ数十株が生育しているのを新たに発見した。東京湾一斉調査の対象とした2022年8月下旬には株数が大幅に減少していたが、季節的な現存量変化の可能性もあるため、今後、観察を継続する予定。



写真5 コアマモ確認地点周辺の概観



写真6 採取試料(2022年8月2日)



写真7 水中の様子(8月下旬)



写真8 生育状況(8月下旬)

おわりに

ブルーカーボンの貯留効果などが注目されるようになり、藻場再生の重要性は一層高まっていることから、私たちは今後も東京湾奥部のアマモ場の探索と追跡調査を実施していきたいと考えている。

近年の東京湾奥部では、今のところ大規模な天然群落の形成には至っていないものの、多摩川河口をはじめとする干潟域※にコアマモが着生し、生育と消失が繰り返されているとみられ、将来的にアマモ場が再生する可能性はある。これらのコアマモが、①どこからどのように加入してきたのか、②群落が形成・維持される条件は何か、を明らかにすることが課題である。

※船橋市、習志野市でも確認されている。

【関連情報】「希少海草コアマモの保全に向けた生育場環境の実態調査(令和2~4年度)」



東京都環境科学研究所 石井裕一先生が、国立科学博物館 田中法生先生との共同により、東京湾・多摩川河口コアマモ場の保全・再生に向け、多摩川河口と周辺域のコアマモの生育場環境と遺伝的特性の研究に取り組んでいる。(予定した調査・分析を終了し公表準備中。)



【問い合わせ先】

株式会社 日本海洋生物研究所 (MARINE BIOLOGICAL RESEARCH INSTITUTE OF JAPAN CO.,LTD.) 担当: 小海、古田、小松
〒142-0042 東京都品川区豊町4-3-16 TEL 03-3787-2471 E-mail: mbrij@mbrij.co.jp
<http://www.mbrij.co.jp/index.html>